

空気が支配する日本で「天皇制」が担ってきた

「意外な役割」

【対談】大澤真幸 × 木村草太



大澤 真幸 , 木村 草太

社会学者の大澤真幸氏と、憲法学者の木村草太氏が、天皇制の過去・現在・未来をめぐって対話した『**むずかしい天皇制**』（晶文社）。この本の刊行を記念して、2021年6月20日に代官山蔦屋書店主催で行われた対談イベントの内容をまとめました。テーマは、大澤氏の近著『**新世紀のコミュニズム**』（NHK出版新書）ともからめた「資本主義と天皇制」。「資本主義の限界」が言われるなか、天皇制の持続可能性をどう考えたらよいのでしょうか？

【構成・山本ぽてと】



天皇制は例外状態の時に出てくる

大澤 今回は私と木村さんの対談本『むずかしい天皇制』刊行を記念してお話をします。一般的な本では「すぐ理解できる！」ことを売りにしそうですが、「むずかしい」をわざと前面に出した珍しい本です。今の時代、「むずかしい」と率直に言ったほうがよいと思いましたが、実際、わりと読者に届いているようで良かったですね。

木村 ええ。今日も「むずかしい」話になるかもしれません（笑）。大澤先生の新刊『新世紀のコミュニズム』にも絡めながら、色々とお話できればと思います。

まずお聞きしたいのは、現在のコロナ禍についてどう定義しているのかです。緊急事態宣言が出される中、「コロナに打ち勝った証」だったはずのオリンピックが開かれようとしている。現在を「日常」と捉える人も、未曾有の緊急事態だとする人もいます。

今回の感染症は、民主主義体制において対応が難しい感染症なのではないかと思いました。ものすごく致死率が高いのであれば、なにがなんでも封じ込める対策をしようと意志決定の合意がしやすい。しかし、致命的な影響の出る割合が年代によって全然違うため、ただの風邪と主張する人から、極めて危険な感染症として扱う人まで様々でした。もちろん、感染症の専門家の方の多くは、封じ込めなくてはいけない凶悪なウイルスだと認定しているわけですが、国民みんなが参加する民主主義に基づく集合的な意志決定は非常に難しい。

大澤 社会の中でも個人の中でも、コロナを日常の一部とするか、例外的な状況だと考えるのか、ふたつの心の動きがある気がします。僕のスタンスとしては、この状況をクリエイティブに解釈するために、例外的な状況として捉えるほうがいいんじゃないかと思っていますね。ただし、それは、一過性という意味での例外ではなく、むしろ私たちをかつての日常へと二度と戻すことがない、という認識を付けた上での例外です。

そのことを理解してもらいたいという意味もこめて、『新世紀のコミュニズム』では「人新世」（Anthropocen）という概念を取り上げました。「人新世」とは地質学上の時代のこと。人間の活動が地球の生態系に大きな影響を与えるようになったという意味ですが、それだけではなく地球の生態系の大規模な「破局」の予感も伴い、終末論的な臭いがあります。そしてコロナ禍の状況を意味あるものとして受け取るとするなら、映画の予告編のようなものだと感じました。人新世の終わりになにが来るのか、一瞬見せてくれる。

天皇制の話と関連させると、日本人にとって天皇制は日常になっていますよね。普段はほとんど意識しないが、例外状態の時に天皇制が出てくる。例えば、明治維新が始まった時もそうです。そして、現在は例外状態であるともいえます。オリンピック開幕の一月前に、天皇が――宮内庁長官の口を通してというかたちで、ですが――、オリンピックで感染拡大を懸念していると異例の発言をしましたが、これは、コロナ禍が天皇が登場するような例外状態のひとつだということを示している、とも解釈できます。

資本主義、土地、天皇制

大澤 今回は私と木村さんの対談本『むずかしい天皇制』刊行を記念してお話をします。一般的な本では「すぐ理解できる！」ことを売りにしそうですが、「むずかしい」をわざと前面に出した珍しい本です。今の時代、「むずかしい」と率直に言ったほうがよいと思いましたが、実際、わりと読者に届いているようで良かったですね。



木村 資本主義とは少しズレますが、土地と天皇制の関係については『むずかしい天皇制』でも取り上げましたね。

大澤 日本においては、西洋風の土地の所有の概念がありませんでした。「俺はこの土地を実際に占有し使用している」という現実と、「公地公民だから天皇のものだ」とする建前に矛盾が生じて、どうにか処理しようとしているうちに、占有と所有の中間のような荘園制度が生まれてきたのです。所有の概念から天皇制にアプローチすると面白いことが見えてくるので、本の中でも注目してほしいですね。

「キューブラ＝ロスの5段階」を天皇制にあてはめる

木村 次のキーワードは「キューブラ＝ロスの5段階」です。人は死を迎える時、(1)否認、(2)怒り、(3)取引、(4)抑うつ、(5)受容、の段階があると言います。これから注目されるべき概念であるとのことですが、どのあたりにポイントがあるのでしょうか。

大澤 「キューブラ＝ロスの5段階」とは、死ぬことが確実にになってしまい、そのことを告知された人がどのように死と関わっていくのか、一般的に5つの段階があるとする説です。地球や、人類の破局に対しての関わり方にそのまま応用できます。

「あなたはあと数ヶ月で確実に死ぬ」と言われている時、最初の4段階ではそこからどう逃れようとするのか考えます。例えば、「取引」とは、運命と取引すること。例えば、死ぬかもしれないけれど、あと1年で本が書き終わ

るので、もうちょっとなんとかお願いできませんかね、と運命と取引します。ですが最後の「受容」の段階になると、死ぬ運命に対してはじめて前向きに行動することができる。本当に重要なことを選択できるのは、受容し終わったときなのだと言います。

SDGsなどは、「なんとか希望はあるんだ」とか「電気自動車に切り替えれば大丈夫かも」とか否認や取引をしているように見えます。ですが、本当は受容して絶望したほうがいいのだと思っています。そうすると、今までにとつてい不可能だとして計算にも入れていなかった新しい選択肢が現実的なものとして見えてくるのです。

天皇制も同じですよ。天皇制の破局の可能性を直視しないと、抜本的に見直すことができないと思うんです。天皇制の持続可能性について、本気で考えている人はほとんどいないでしょう。せいぜい女性の天皇制を認めるかどうかしか議論されていませんが、女性や、あるいは女系の天皇を認めたとしても、天皇制の持続可能性が十分に保障されるとはとうていいえない。もし制度を持続可能なものにするなら、抜本的な考え直しが必要でしょう。それからもうひとつ付け加えておくと、改革された制度がわれわれの正義の感覚と合致するものでなくてはならない。ジョン・ロールズが言っているように、真理が学問の徳であるのと同様に、正義は社会制度の唯一の徳です。

木村 抑うつ先の、受容が大切であると。今の天皇制の方法では、世襲できなくなる時が来る可能性はとても高い。また、わずか数人、天皇即位を拒否しただけで制度は立ち行かなくなります。その事実をどう受容するかですね。

ちなみにこの5段階のプロセスは、差別主義者の態度にも似ていると思いました。差別を指摘されるのは、自分の中の邪悪を指摘されることであり、倫理的な死のように体験されます。ですから、最初は否認します。次に「差別的だと攻撃された」と怒り出す。そのあとに「これくらいの制度なら認めるよ」と中途半端な制度で取引をはじめます。でも世の中の流れが変わってくると、いよいよ抑うつになり、最終的には認めることになる。いろんな所で見られる現象ですね。



大澤 差別はその人のアイデンティティそのものに関わってくるんですよ。差別することとその人がその人であることが同じだったりするので、単に知識をつければいいだけではない。自分にとってのアイデンティティの死を克服しなければ、差別主義を真に克服することはできませんから。

我々は天皇制に「アイロニカルに」没入している

木村 次のキーワードは、大澤先生が提唱した「アイロニカルな没入」です。『むずかしい天皇制』でも重要な概念として扱いました。思考の上では距離が取れているが、行動の上では没入している様子を指します。例としては、初詣でしょうか。本当に神様を信じているわけではないが、毎年お参りをしてしまう。この概念はどのような文脈から出てきたのでしょうか。

大澤 明示的に使ったのは、オウム真理教について書いた『**虚構の時代の果て**』だと思います。オウム信者はハルマゲドンが来ることを信じていたといいます。それだけ聞くと、なんて頭の悪い人なんだと思ってしまう。しかし彼らの中には元研究者や優秀な大学出身者も多くいた。ハルマゲドンはないとわかっているけれども、彼らの行動はそれを前提にしているんです。これを「アイロニカルな没入」と私は言いました。

こうした、思考と行動がねじれてた現象は、様々な場所で起こっています。まさに天皇制もそうです。日本人は天皇に対して敬意を持った行動をしますよね。しかし外国の人から「なんで天皇が大事なの？」と聞かれたら答えられるのでしょうか。

大澤 今の時代、天皇を天照大御神の子孫だと信じている人はほぼいないと思います。でもそれを前提にしないと、皇室だけ日本の中で特別なファミリーだとする根拠はありません。合理的な理由が説明できないのです。だから僕らは、古事記や日本書紀に書いていることを信じているわけではないが、行動の上では文字通り受け取って没入していると言えます。

木村 ここは面白いところです。

大澤 ポストトゥルースの時代になってくると、ますますそうなっていくでしょう。Qアノンの言うことを本当に信じているわけではないが、行動の上では信じているかのように振舞っているのだとか。

木村 最近では、日本学術会議で6人が任命拒否されたことが話題になりました。なぜこの6人が拒否されたのか、誰がどう見ても本音がわかるけれ

ど、政権は喋らない。思想で差別していると言うのは、マズいことは分かっているのでしょう。でも、行動は、明らかに思想による差別。

今の政治は、行動だけが大事で、そこに至る理由や思考はどうでもいいでしょうと、議論を拒否するような態度を取っていると感じています。今のオリンピック・パラリンピックの流れを見ても、マズい面があるのは認識しているのに、それを正面から議論しないで、行動だけが進む。

大澤 日本は「アイロニカルな没入」が蔓延しやすいかもしれませんね。自分の行動が思想としてどのような意味を持つのかについて、意識していないのだと思います。なぜ天皇が大事なんですか？ と問われた時に、説明できる必要があると思います。

天皇制は「メタ空気」である

木村 次にお話したいキーワードは「空気の研究」です。『**空気の研究**』は1970年代の山本七平さんの著作であり、日本人が物事を決めるときには「空気」を重要視していると指摘しています。

大澤 天皇制を考える上で、「空気」は非常に重要です。

木村 「制度」「規範」「道徳」など私たちの意思や欲望を拘束するものがあるわけですが、それらと比べて「空気」はなにが違うのでしょうか。

大澤 人間が集団をつくれれば空気はどこにでも生まれます。しかし、空気はしばしば間違えるのです。例えば他の地域と争っているような時に、空気に流されてしまって、十分に合理的な選択をしないと、簡単に負けてしまいます。日本の太平洋戦争はその典型です。空気に流されて、アメリカに宣戦布告してしまい、空気に流されて、敗戦の受け入れに遅れてしまった。

多くの文明では、だから、空気に流されないためにどうしたらいいのか、という工夫がなされてきた。制度や規範や道徳は、空気に対する対抗措置です。そうして対抗装置の中で最も強力なのが、一神教の「神」です。極論すれば、文明とは空気対抗措置なのかもしれません。空気としてはそうなんだけど、制度上はそうせざるを得ないとブレーキとして働くことができます。

しかし日本は、そうならなかった。逆に、空気は積極的に肯定されてきた。多分、空気に流されたがために、痛烈な失敗や敗北を喫するということが少なかったからでしょう。先ほど述べた、太平洋戦争の前までは、ほとんど歴

史的に痛い目に合わなかったのです。日本では、空気がわりとうまくいつてきたので、空気に逆らうことが誤りになってしまったのです。そして日本において、天皇制こそが空気の存在の保証、空気の空気となっているというのが、『むずかしい天皇制』の中での僕らの結論です。

木村 天皇制は空気の空気、「メタ空気」であると。なんのために天皇制があるのか、考えたことがない人も多いのは、まさに空気の空気であるからでしょう。

……………対談は【後編】「日本人は「天皇制」をどう受け止めてきたか？

決定的に「欠けていた視点」」に続きます。